

野辺地町の地誌的研究について

川 村 卓 也

1. はじめに

地理学のなかで地域性を明らかにすることは、きわめて重要なことである。この地域性を明らかにするには、その地域の自然環境、人文環境、社会環境などを調査し、その間の相互関係を分析することによって地域の特性を明らかに出来るものと思われる。ここでは、野辺地町を研究対象地域に選定し、野辺地の地域性をいくぶんなりとも明らかにしようとするものである。具体的には、人口、商業、漁業、農業、交通を地域究明の指標とし、これにむつ、小川原開発との関連も加え、この論文を進めていくことにする。

2. 研究地域

野辺地は、明治初期まで、その恵まれた地の利と港によって、東北有数の繁盛の地であった。しかし、明治24年東北本線が開通したことにより、港の利用度が減少し、野辺地は、衰退の一端をたどり、現在にいたっている。

町総面積は、82.9km²と比較的せまく、海岸線に沿って東北方向に細長いのが特徴である。総面積の8割が山地で、一部で草地や畑地に利用されている以外は、山林、原野がほとんどを占め、平野は、野辺地川沿にわずかに見られる程度である。

3. 人口

野辺地町の人口は、大正7年すでに10,000人を越えているにもかかわらず、53年10月31日現在までの約60年間に9,000人の増加を示しているにすぎない。

第1表は、49年と51年、53年を比較して各地区別の人口、世帯数の増減、増減率を示したものである。

地区別の人口をみてわかるように、本町人口の8割までが野辺地地区に集中しており、他町村と比較して後背農村人口の占める割合が少ないのが特徴である。

人口が一貫して増加を示しているのは、野辺地地区だけである。野辺地地区人口増加の原因としては、ある程度発達した市街地をもつ都市では、市街地の人口が減少するという傾向がみられ

るが、本町においては、まだ市街地の発達が不十分で居住地に余裕がみられるため、比較的便利で地形的にも恵まれた野辺地地区に人口が集まったものと思われる。

むつ、小川原開発によって、新たに本町とその周辺地域に16,000人の就業者の増加が見込まれている。これにより若年労働力の地元定着や人口のUターン現象が増加し、人口は増加するものと思われる。

4. 商業

本町において、農業、漁業のふるわない現在、なんといっても商業は、野辺地町の唯一の基幹産業といえる。

現在の、野辺地町は広く青森市商圏内に含まれており、青森市への流出がかなりみられるが、周辺町村からの流入もみられ、小さいながら野辺地町商圏を形成している。この商圏に入る地域の人口合計は野辺地町19,000人、横浜町4,500人、東北町8,500人、天間林村5,500人、平内町3,000人の計45,000人に及ぶものと推定され、町としてはある程度広い商圏を確保している。このように広い商圏をもつ原因としては、この地域に大きな都市がないこと、各都市の中間の交通の要所にあるということ、近隣町村との交通の便が良いことなど商業立地環境としては、恵まれたことが考えられる。

（第2表）は、野辺地町とほぼ同じ人口をもつ他町との小売業の比較を表わしたものである。本町の商業規模は、人口18,000人から19,000人を有する他町と比較して大きいし、小売業では、現に県内8市につぐ売上高をあげている。

むつ、小川原開発によって本町とその周辺地域に新たに16,000人の就業者の増加が見込まれており、現在の商圏人口45,000人にこれを加えると、商圏人口は61,000人になると予想される。また、開発途上における工業従業員は20,000人から30,000人になるといわれており、開発地区に時間的、距離的にもっとも近い本町において、野辺地町商圏人口には急激に拡大すると考えられる。このように、商圏人口が増加することにより大型店の進出が十二分に予想される。

（第1表） 地区別、人口、世帯数の増減、増減率（▲減少）

区分 地区	人 口			増 減 率		増 減 率		世 帯 数			増 減 率		増 減 率	
	49	51	53	49-51		49-53		49	51	53	49-51		49-53	
野 辺 地	15,335	15,527	15,718	192	1.3	383	2.5	4,211	4,418	4,617	207	4.9	406	9.6
馬 門	2,333	2,334	2,319	1		▲14	▲1	519	538	551	19	3.6	32	6.1
有 戸	655	624	615	▲31	▲4.7	▲40	▲6	130	129	131	▲1	-	1	-
木 明	195	190	85	▲5	▲2.6	▲10	▲5	34	38	35	4	12	1	3
明 前	146	139	136	▲7	▲4.8	▲10	▲6.8	27	32	27	5	18.5	0	-
目ノ越	104	87	81	▲17	▲16.3	▲23	▲2.2	23	21	22	▲2	▲8.7	▲1	▲4.3
野辺地町	18,768	18,903	19,054	135	1	286	2	4,944	4,944	5,383	232	5	439	9

(第2表) 他町小売業との比較(51年)

項目 町名	人 口 (人)	売上高 (百万円)	売上面積 (m^2)	店数 (店)	従業員 数 (人)	1店当 り売上 高 (万円)	3.3 m^2 当り売 上高 (万円)	従業員1 人当り売 上高 (万円)	人口1人 当り売上 高 (万円)
野辺地町	18,120	9,009	18,161	336	1,178	2,681	163.7	764.8	49.7
平内町	17,314	3,557	10,653	248	582	1,435	110.2	611.3	20.5
鯉ヶ沢町	17,967	4,462	11,566	308	778	1,449	127.3	573.5	24.8
板柳町	19,041	7,996	16,823	334	933	2,394	156.9	857.1	42.0
鶴田町	17,144	2,331	8,798	208	513	1,121	87.5	454.6	13.6
五戸町	19,864	5,235	11,491	260	734	2,014	150.4	713.3	26.4
青森県	1,482,877	677,724	1,324,481	23,183	78,872	2,923	168.9	859.3	45.7

5. 漁業

本町の漁業は、ホタテ一本と言っても過言でないほどホタテにたよっている。そのため、近年のホタテの異常へい死は本町の漁業にとって、多大な打撃をおよぼしている。

(第3表)は、本町とはほぼ同じ陸揚金額を示す他市町村との陸揚量の比較を表わしたものである。これをみてわかるように陸揚量では、他市町村と比較して低いが、陸揚金額は決して低いものでない。このように陸揚量の割には比較的高い陸揚金額をあげているのが、本町漁業の特色といえる。

(第3表) 他市町村との漁獲量の比較(51年)

項目 町名	年間陸揚金額 (百万円)	年間陸揚量 (t)	陸揚量1tに対する陸揚金額 (万円)
野辺地町	624	2,450	25
今別町	634	3,114	20
むつ市	522	3,177	17
脇野沢村	639	4,780	13
青森県	91,080	52,175	17

6. 農業

本町農業は津軽地方の農村地帯と比較して、以前から兼業農家、それも第2種兼業農家が多くこれが本町農業の特色となっている。総農家数は1,003戸で経営規模別にみると、0.5ha未満554戸で55.3%と半分以上を占め、1ha未満の農家では768戸で76.8%と全体の8割近くまでを占めており、いかに本町の農業は零細規模経営の農家が多いかがということがわかる。

農村地域に工場が進出することにより、一部を除く大部分の農家が兼業化(脱農家)の方向に進むということはすでに述べられているところである。そこで、むつ、小川原開発が予定されている六ヶ所村となりあわせに位置する本町の農村地域はどのような対応をみせるか予想してみたい。

(第4表 農民の意向)

種類別 \ 規模別	40～100 (a)	100～200	200～300	300～400	合 計
すすんで働きたい	D. H				2戸
どちらかといえば働きたい		E	C. G. I	A	5
どちらでもない		T			1
働く気はない		E		F	2
合 計	2戸	3	3	2	10戸

(第4表)は、農家に対して、むつ、小川原開発の開発途中、開発後に働きたいかと訪ねた結果をまとめたものである。数は少ないがその傾向はつかむことができる。はっきりと働く気はないと登えた農家は、EとFの2軒だけで他は大かれ少なかれ働いても良いということであった。このように、本町農家もむつ、小川原開発によって兼業化の方向に進むことが予想される。

7. 交通

本町は、交通運輸の条件に非常に恵まれており、下北、上北地方および県の南部と津軽を結ぶ交通手段は野辺地町に集中している。しかし、この交通量は単に野辺地町を通りすぎるだけのものであって、野辺地町の何の利益ももたらさない。つまり、交通量と町の発展に寄与する経済的なものとの関連は、現在の本町においてはまったくといっていいほどみられない。

8. むすび

野辺地は古くからその恵まれた地の利を生かして、商業の町として小さいながらも比較的安定した商圈を確保しつつ、ゆるやかではあるが発展してきた。これといって取り上げるべき産業のない現在、野辺地を商業の町として位置づけることができると思われる。

他産業のふるわない現在、商業のウエイトはますます増加することが予想される。その意味でも、むつ、小川原開発によるメリットを最大限に吸収できるよう短期的、長期的対応策を立て、努めなくてはならない。

むつ、小川原開発をひかえ、野辺地町は大きな岐路に立っているといえる。

参考文献

1. 青森県水産商工部漁港課 (1976)
「青森県の漁港々勢集」
2. 尾崎 四郎
「郷土地誌提要」 三省堂
3. 田島 康弘 (1971)
「工場の進出に伴う相模原西部農村地域の変貌」

4. 野辺地史
5. 野辺地町商工会（ 1976 ）
「野辺町商店街報告書」
6. 野辺地町（ 1975. 1977 ）
「町勢要覧」